

佳作
「大切な毎日の一日」

井上 美波さん

「特別はいらない。普通の毎日が大切。」

これは、今も元気な祖父の大好きな言葉です。私の祖父と祖母は、今年、六十五歳になります。高校生のとき、同じクラスで出会い、若くして結婚し、私の母を生み、四十歳半ばで子育てを終えました。十五歳の私から見ても、おじいちゃん、おばあちゃんといった感じには見えず、とても若々しい二人です。そんな祖父母が毎年欠かさず受診しているのが人間ドックです。

仕事から、まじめな祖父は、誰よりも健康に気を遣う人で、飲酒や喫煙は一切せず、休日はアウトドアやボランティアで体を動かしていました。定年退職後も、これまで以上に健康を保っています。

祖母も行動的な大阪のおばちゃん、どこに行くにも元気に自転車をこいでいます。

「次の大阪マラソンに出よっかな。」

なんて、笑いながら言っています。

そんな二人が三年前に受けた人間ドックの結果に、全員が驚きました。

祖母に大腸がんが見つかったからです。

祖母は、祖父がいないとき、母と私に言いました。

「あんただけに伝えとくな。もし、おばあちゃんに何かあったら、おじいちゃんのこと頼むからな。」

肩を落とした祖母が小さく見えました。

母がすぐに言いました。

「何言ってるの。手術したら大丈夫ってお医者さんが言うてたやん。早期発見で良かったって！」

私も何か言いたかったけれど、『がん』という言葉の恐ろしさに体が固まってしまい、ただ、うんうんとうなずくしかできませんでした。

私の前に座っていた祖母も、うんうんとうなずきながら、泣いていました。

手術の日が近づくと、祖母の元気がなくなりました。祖父は、心配しなくても大丈夫だからと励まし、母は手術後のことについて楽しく話していました。祖母も笑っていましたが、私はとても恐かった。大好きな祖母が、明日いなくなってしまうかもと考えたら、恐くて笑えなかった。『がん＝死』が、私を押し潰そうとしていました。

何かできることはないのか。祖母を元気にする何かを。平凡かもしれない、普通かもしれない。だけど、勇気、希望の願いを込めた千羽鶴を折りました。

手術の日、「がんばって、待ってるから。」と、声をかけた祖父と母。私も、「私もついてるから、がんばれ。」と、百羽しかない折り鶴を祖母に渡し、笑顔で言いました。

祖母は、買い物にでも行くかのように、笑いながら手術室にむかいました。あとは、信じて待つだけです。

手術は思っていたよりも早く終わり、がんの転移もありませんでした。祖父も母も力が抜けたように笑い、私はスキップしたくなるくらい喜びました。

祖父が私に言いました。

「な、人間ドックの早期発見って大事やろ。一年一回で助かる命がようさんあるからな。」

私は何回も何回もうなずきました。

がんは、自分の中で育てている病気なのに、存在すら気付かず、何か変だ、何か痛いと思った時には、手遅れかも知れません。

私たちは体の中を自分で見るができない以上、人間ドックこそが、自分の目であり、手であり、命を守る自分自身そのものだと思います。

人間ドックを受診できる国に生まれた私たち。スマホやパソコンから情報を見たり、世界の裏側を見る前に、自分の体の中を見てもみませんか。『すべてのがん＝死』でないことがわかってもらえます。

なにも特別なことではありません。大切な毎日が、そこにあるだけです。